美術科教育学会通信 №48

２００３年　３月７日発行

事務 ／通信　〒184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１
東京学芸大学 美術学科 美術科教育学研究室内　柴田和豊宛
Ｔｅｌ．／０４２（３２９）７６０８　Ｆａｘ．／０４２（３２９）７５９９（柴田直通）
Ｔｅｌ．／Ｆａｘ．０４２（３２９）７５９４（相田直通）
Ｅ－Ｍａｉｌ．/kshibata@u-gakugei.ac.jp（柴田）　/aidaman@u-gakugei.ac.jp（相田）

美術科教育学会第25回横浜大会「プレ・シンポジウム」報告

コーディネーター
新井哲夫（群馬大学）

平成15年1月25日（土）、横浜国立大学教育文化ホール中会議室において、「危機に立つ美術教育－小・中学校における美術教育の現状と課題、そして美術科教育学会の果たすべき役割－」をテーマに、石賀直之（横浜市立磯子小学校）、高野直美（川崎市立日吉中学校）、岩崎由紀夫（大阪教育大学）、天形　健（福島大学）の四氏をパネリストに迎えて、表記のシンポジウムを開催した。以下に、その概要を報告する。

午後1時30分、副代表理事の宮坂元裕氏（横浜国立大学）から開会の挨拶をいただき、開会。冒頭で、コーディネーターの新井が「新学習指導要領の施行と美術教育の現状」と題して基調報告を行った。

内容は、(1) 新学習指導要領施行後の教育現場の現状、(2) 教員養成制度の問題、(3) 教員養成課程における美術教育の問題、(4) 小・中学校における美術教育の課題の４つの視点から、美術教育が直面している危機について分析したものである。

その後、「美術教育の現状をどう見るか、どこに問題があるのか」について、パネリストの四氏から発言をいただいた。発言の要旨は以下のようである。

＜石賀氏＞小学校の全科担任の立場から見ると、他教科と比較し、図画工作の存在そのものが希薄に（薄く）なっている。他教科に比べ、親の目も厳しくなく、子どもたちも図工が好きであることに、教師が甘えてしまっているのではないか。

＜岩崎氏＞生活の変容に伴って、描けない子どもや関心・意欲が希薄な子どもが増えている。一方、教師の側にも、「型」を追求する指導やリニア化した指導などによる作品への傾斜（結果偏重の傾向）が見られる。教科の目的・目標を子どもと教師が共有できていない。作品主義から脱却するためには、目的・目標の明確化が必要。題材を子どもたちにどう出会わせるかの検討が必要。

＜高野氏＞総合的な時間の準備、絶対評価への対応に現場は振り回されている。授業時数の縮減で、学べる内容が狭まっただけでなく、作品を完成できない生徒が増えた。また、遅れがちな生徒に対する支援が困難であることを痛感させられている。

＜天形氏＞美術教育は何をやってきたのかという反省を、今、しなければならない。育みたい能力についての意識が教師に足りないのではないか。絵を描くことがうまい、道具や材料を知っている、楽しい、大事だという認識が実感とともに育まれていかなければならない。美術を好きと思えない子どもたちが、美術の危機的状況を生み出しているのではないか。

上記の発言を受け、四氏の発言内容が集中する現場の美術教育の在り方に焦点を絞って議論を進めることとした。続く第２回目の発言の要旨は以下のようである。

＜石賀氏＞教育と芸術との間に見えない壁があるとしたら、その中でどのように美術教育が存在しているのか考えさせられた。題材だけでなく、「育みたい能力」について認識するとともに、それをどう見ていくかという、目的と評価の問題を見直す必要がある。
＜高野氏＞美術は情緒的な部分が強調される教科であるが、造形的な思考力や視覚言語を身に付けて欲しいと思う。漠然とした生きる力や情操ではなく、何を育てるか、どういう能力をつけていくかを重視している。楽しいだけの授業も、うまい作品を軸にした授業も崩壊する。わかる授業にシフトする必要がある。川崎市の研究チームでは、伸ばしたい力を一人一人の教師が見直して、自分の教えることが子どもにどのような意味を与えるかを考えて授業を行っている。
＜岩崎氏＞作品から受ける印象の評価ではなく、子どもに合わせた評価、なぜその作品がよいのかを把握する必要がある。図工は、自分で目的・目標を立てられる唯一の教科。しかし、子どもには目的・目標の設定をする力が足りない。図工は、よい無駄ができる教科である。うまくいかなくてもやり直しができ、それが保障される教科である。造形遊びなどはその典型。段取りを整えすぎるのもマイナスである。しなやかな支援が必要。
＜天形氏＞学習活動の背後の学びについて学会で話し合われている教科はほとんどない。総合学習に取り組むことにより教師の学習観が新しくなっている。美術の学力とはと聞かれ、答えられない。現場の教師がわかるような形で発信する必要がある。

休憩の間に、フロアーから質問・意見を記入した用紙を回収し、休憩後、回答の時間をとった。主な質問、意見は以下のようである（回答は省略）。

＜大坪氏（武蔵野美大）＞授業時数削減に対して学会が明確な態度を示す時期ではないか。早急な答えはむずかしいが学会として研究を進めるべき。／中等教育段階の美術教師の専門性として、幅広い知識、技能、見識は必要だが、「東京ハンズのインストラクター」であってはならない。専門家養成教育と普通教育としての造形美術教育の融合こそ必要ではないか（天形氏への質問）。
＜落合氏（福島大院）＞フィードバック」から「フィードフォワード」へもっていくための具体的な実践例があれば聞きたい（岩崎氏への質問）。
＜高橋氏（川崎市総合教育センター）＞美術における「振り返り」「制作の支え」「次へのステップ」をふむためのポートフォリオ、学習ノートの在り方についてお聞きしたい。
＜橿渕氏（横浜・上川井小）＞図工でA、B、Cをつける意味がよく分からない。小学校の評価は全部文章記述でよいのではかいか（岩崎氏への質問）。
＜北原氏（福島大院）＞教育と芸術の間にある壁について詳しく聞きたい（石賀氏への質問）。
＜丸　氏（横浜・都岡中）＞美術科については、道具教科としての意義を強調した方がよいのではないか（天形氏への質問）。時間数の不足は二学期制で改善できないか（高野氏に対する質問）。

質疑応答の後、4氏の主張のまとめとして、以下のような発言をいただいた。

＜天形氏＞学力低下が話題になっているが、教師、世間の間にズレがあるのではないか。絶対評価が実施されたが、規準の統一が行われれば、相対評価以上によりも信憑性が高くなる可能性がある。評価を客観性だけで捉えるのは危険。それが子どもにとってどのような意味があるか考える必要がある。評価規準を決め、それを事前に子どもに知らせて授業を行った方がよい。それが明確な目標になる。
＜岩崎氏＞図工の評価に関しては、規準や基

準をどうするかも大事だが、一方で子どものよい点を認定的に認めていく評価も必要。小、中学校という器はそのままでも、子どもの発達段階を考慮して、小学校高学年と中学校3学年とを合わせたカリキュラムを編成するなどの、内容の工夫は可能である。そうした問題については学会として情報提供して行く必要がある。また、小・中学校の連携だけでなく、学校教育と社会教育とも連携も積極的に進めていく必要がある。
＜高野氏＞授業は、ただ楽しければよいのではなく、中身に十分に踏み込んだ授業ができなくてはいけない。「内なる危機」を克服するためには、美術教師が孤立せずに、互いに協力し合う必要がある。教師間で交流する際、情報通信ネットワークを活用するとよいと思う。美術科教育学会では、小・中学校の9年間をトータルにとらえたカリキュラムの見直しや、教材の意味の理論付けなどに取り組んで欲しい。
＜石賀氏＞評価については、柔軟性よりも、一度は評価方法をシステマティックに組んでみることが必要ではないか。それによって、子どもの見方、子どもの活動のとらえ方をきちんと教師に提示していく必要がある。冒頭で、図工の存在が希薄化していると述べたが、それを打開するには、図工が趣味的なもの、楽しむだけのものと受取られている現状に一度楔を打ち込んでみる必要がある。

四氏の発言の後、質疑応答の際、紹介しきれなかった堀、浜本両氏から、以下のような趣旨の意見を口頭で発表していただいた。

＜堀氏（横浜国大）＞埼玉県志木市の取り組み（市内に４つある中学校の学区を撤廃し、一つの中学校を１学部に、そして全体を４学部からなる大学と見立て、それぞれの中学校で理系、文系、芸術系といった特色ある教育を行う試み）のようにすれば、美術（芸術）を重視した教育も可能になるのではないか。
＜浜本氏（武蔵野女子大）＞いろいろな意見があり勉強になるが、それだけで終らせず議論を積み重ねるためには、学会や学会内の委員会などで、美術教育に関わる者の拠り所となるような共通の見解などをまとめ、提示する必要がある。

以上の発言の後、新井が、美術教育の危機を克服するための課題として、(1)子どもの発達段階や学習経験を見据えた美術教育の議論が必要性であること、(2)教員養成における美術教育（教科教育、及び教科専門教育）の在り方の見直しが必要であること、(3)教師としての専門的力量の向上が求められること、(4)全科担任が理解でき、指導できる図工教育の在り方や、中学校生徒の発達的特性を十分に踏まえた美術科の指導の在り方が求められることを指摘し、シンポジウムのまとめとした。

最後に、学会代表理事の柴田和豊氏から閉会の挨拶をいただき、午後5時15分過ぎ、シンポジウムを終了した。参加者は、スタッフを含め、47名であった。
パネリストの四氏をはじめ、ご参加いただいた方々、学会役員諸氏、そして準備から当日の運営、片付けに至るまで献身的にバックアップしていただいた横浜国立大学の宮坂元裕教授と院生諸君に深く感謝いたします。

＊　＊　＊

第２５回美術科教育学会横浜大会

―最終案内―

大会ホームページ　http://www5e.biglobe.ne.jp/~miyasaka/
（只今公開中）

寒冷の候，皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。さて，次のとおり美術科教育学会横浜大会の日程・参加申し込み等の詳細が決まりましたのでご案内申し上げます。

■ 会　　期　　平成１５年３月２６日（水）～２８日（金）
■ 会　　場　　横浜国立大学教育文化ホール
■ 大会テーマ　　鑑賞・表現による教育　―メディア芸術と文化芸術振興法の狭間で―

横浜トリエンナーレなどで積極的に取り組んだ、メディア芸術というジャンルは急激に拡大しています。学習指導要領・中学美術にも映像メディアは取り入れられるようになり、私達はこのことを無視できなくなりました。子ども達は既にパソコンの画面上で表現や制作を始めています。

一方、文化芸術振興法は、将来日本が文化や芸術を輸出する国になるようにと打ち出されたものです。学校教育の関係者は一瞬喜びましたが、よく読んでみると、学校教育は、あまり期待されていません。むしろ学校教育では文化や芸術を世界に輸出するような方向は期待できないと読みとれる部分もあり、私達は奮起しなければなりません。

26日の講演は、現代フランス哲学が専門で、メディア芸術に造詣が深い、横浜国立大学教授小野康男氏に、「鑑賞教育と美術学の曖昧な関係」と題して語ってもらいます。27日の講演は、InSEAハンブルク大会で基調提案を行ったオルデンブルク大学名誉教授、ルドルフ・ツア・リッペ氏を招聘し、芸術の鑑賞・表現における精神性について2時間にわたり語ってもらいます。

横浜は新しい芸術文化の中心になりつつあります。また、横浜駅―東京駅は30分で結ばれています。
ぜひ横浜におでかけください。

会場へのアクセス

東海道新幹線をご利用の場合
新横浜駅下車 →横浜市営地下鉄にて三ツ沢上町駅下車(所要時間10分)→ 徒歩で大学へ

東海道線・横須賀線・東急東横線をご利用の場合
◎横浜駅下車 →横浜駅西口よりバス乗車 →
ザ・ダイアモンド地下街E階段202系乗車岡沢町下車(所要時間25分)→ 徒歩で大学へ
横浜駅下車 →横浜市営地下鉄にて三ツ沢上町駅下車(所要時間6分)→ 徒歩で大学へ
横浜駅下車 →相模鉄道線にて和田町駅下車(所要時間10分)→ 徒歩で大学へ

参加申し込みについて

■ 参加費　〔学会参加費〕　5,000円
　　〔懇親会〕　3,500円／学生（院生を含む）2,000円

◎宿泊は各自でご準備ください。横浜駅周辺が便利です。

宿泊先参考ホテル名：リッチ横浜(045-312-2111),横浜東急(045-311-1682)
横浜国際(045-311-1311), ヨコハマプラザ(045-461-1771)

■ 参加申し込み最終期限：3月14日(金)

参加申し込み及び参加費・懇親会費の払い込みは，郵便振替払込書でお願いします。
必要事項をご記入のうえ，以下の口座（事務局宛）にお振り込みください。

口座番号：00230-5-74034　　口座加入者名　：　美術科教育学会横浜大会事務局
通信欄　：学会参加費／5,000円
　　懇親会費／3,500円　学割2,000円

※当日受付も行いますが，大会運営上できるだけ事前にお申し込みください。また，3月15日以降は口座に振り込まず，当日，受付にてお支払いください。

■ 問い合わせ
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
横浜国立大学教育人間科学部美術教育講座内　美術科教育学会横浜大会事務局　宮坂元裕
Tel 045-339-3453　E-mail: ynu_bizyutu@hotmail.com
Fax 045-331-0748

研究発表一覧

研究発表20分，質疑応答5分，移動10分

第1日　3月26日（水）

12:00	受付開始
13:00	開会行事

研究発表	発表会場A ホールA	発表会場B ホールB	発表会場C 大会議室	発表会場D 中会議室
13:20 13:45	触覚体験を取り入れた鑑賞活動の可能性について ―名古屋市美術館での事例の調査から― 中西幸子 愛知教育大学大学院　v A-1	日本美術に対する高校生の意識調査及び考察 星　博人 福島大学大学院　p B-1	授業時数削減下での美術科題材に関する一考察 廣田　定 宇都宮大学大学院　p, o C-1	テンペラ技法の授業への応用に関する研究 ―手工的プロセスに内在する教育効果について― 河原　敦 佐賀大学大学院　s, o D-1
13:55 14:20	美術理論を重視した鑑賞と表現の授業の試み 御厨ふみ 横浜国立大学大学院　s A-2	五感覚と色彩感覚の時代性を踏まえた美術教育 宮之原ノリ子 中・高等学校講師　v, s, o B-2	「プロジェクト型のアート」がひらく新たな次元について 中野　時 千葉大学大学院　v, p, s C-2	創造性研究の展開と美術教育 張　亞蕃 三重大学大学院 D-2
14:30 14:55	造形遊びにおける材料・場所とのかかわりについて 李　美善 東京学芸大学大学院　p A-3	情報化社会における中学校美術科の課題と実践 松原聡俊 横浜市立上郷中学校　p B-3	アートと共成するボランティア活動 高崎めぐみ 千葉大学大学院 C-3	美術教育における「遊び」理論の研究 ―遊び概念の源流の観点から― 村田和樹 京都教育大学　v, p D-3
15:05 15:30	「造形あそび」で育つ子どもの力をもとにした授業の構築とその展開 押田彰子 横浜国立大学大学院　p A-4	戦後の美術科教科書における掲載作品の研究 ―掲載された視覚伝達デザイン作品に関する考察― 山口喜雄 宇都宮大学　p, o B-4	美術／教育：文教政策か文化政策か ―「親しむ博物館づくり」事業の場合― 藤木　月 名古屋芸術大学非常勤講師　v, p C-4	パブリックアートの教材化 ―中学生と大学生との実践と比較― 松田真治・長谷川鐘一郎 富山大学大学院，富山県立高岡聾学校・富山大学　p D-4
15:40 16:05	一斉教育から個別指導へ ―個別学習のてびき"考える"を使用したプログラム― 辻　克巳 森村学園初等部　p A-5	小学校学習指導要領「伝えあいたいこと」(5,6年生)の方法論的考察 細名麻子 弘前大学　s B-5	題材「集団と私」における題材論的方法の研究 ―題材論的方法と絵画療法の教育的作用の関連を求めて― 立原慶一 宮城教育大学　s C-5	パブリックアートの教材化 ―意味論的視点から― 長谷川鐘一郎・松田真治 富山大学・富山大学大学院，富山県立高岡聾学校　s D-5
16:15 16:40			教科再編・統合の動向 岩崎由紀夫 大阪教育大学　p C-6	玩具工芸の研究（ウィルリーギッグとアメリカンフォーク・トーイ） 春日明夫 東京造形大学　s, o D-6

16:50 17:50	講　演：『鑑賞教育と美術学の曖昧な関係』横浜国立大学教授　小野康男先生
18:00	理事会

第2日　3月27日（木）　午　前

研究発表	発表会場A ホールA	発表会場B ホールB	発表会場C 大会議室	発表会場D 中会議室
9:30 9:55	美術館における鑑賞教育 ー見方をひろげる「対話」を目指してー 深山路子 愛知教育大学大学院　v, p A-7	電子ビジュアル時代と鑑賞学習 河上博行 宇都宮大学大学院　p, o B-7	スローアートのすすめ ー地域・自然という視点ー 鈴木　斉 東京都福生市立福生第三中学校　v, s 東京学芸大学非常勤講師 C-7	生徒の能動性を生かす鑑賞指導のあり方を求めて 『風神雷神図屏風を味わう』の題材化を通して 人見和宏 滋賀大学教育学部付属中学校　p D-7
10:05 10:30	中学校美術における鑑賞教育の問題点と改善に関する一考察 町田廣泉 東京都板橋区立板橋第四中学校　o A-8	『色彩学習』を支援するためのコンピュータ教材の開発 森長俊六 広島大学付属中・高等学校　p B-8	中学校における映像表現の実践について 小池研二・相田陸司 大泉中学校・東京学芸大学　v, p C-8	自己評価を重視した評価の在り方 結城克彦 福島大学大学院　p D-8
10:40 11:05	美術を内破する、ある美術館の試み 仲野泰生 川崎市岡本太郎美術館学芸員　v A-9	3DCG教材の基本理解 上山　浩 三重大学　p B-9	J. デューイの芸術教育論に関する研究 ー教育論から「経験としての芸術」へー 川路澄人 島根大学 C-9	視覚障害者の芸術文化参加のための実践活動 ー美術,音楽,建築,ダンス,茶道 他ー 日野あすか 大阪府立今宮工業高等学校（院生）　p D-9
11:15 11:40	「子どもを中心にした教育」の実現に対する提案 ー子どもの造形美術活動から見直す小・中・高・美・大を通した教育課程のあり方ー 遠藤信也・小池研二・大泉義一 東京学芸大学付属高等学校・大泉中学校・竹早小学校　p A-10	現代における「対話と自己形成」 ー映像メディアが拓く自己形成への契機ー 赤木恭子 東京学芸大学連合大学院　p B-10	美術教育と批評 ーデューイ『経験としての芸術』からの示唆ー 山本朝彦 鳴門教育大学　o C-10	「障害者」と「アート」 大内　都 千葉大学大学院 D-10
11:50 12:15	学校と連携した鑑賞教育の実践：世田谷美術館の場合 塚田美紀 世田谷美術館　v, s A-11	メディア芸術教育における非デジタル体験の重要性 畑中朋子 大東文化大学　v, p B-11	デューイと現代美術教育の掛かり合いについての一考察 ー『経験としての芸術』における基本概念の分析をベースにー 前村　晃 佐賀大学　o C-11	教科教育を超えて 鈴木幸子 D-11

12:15 13:15	昼　休　み

午　後

13:15 13:40	ドイツにおける美術館と学校の連携による鑑賞教育 ドラ　ラップシュベル　コルト DORA RAPPSILBEL-KURTH　v, p, o A-12	「コミュニケーション不全」という存在状況からの出発Ⅱ 島田佳枝 東京学芸大学連合大学院 B-12	彫刻についてⅡ ーH. リードからー 岩崎　清 こどもの城　s C-12	表現教育におけるプロジェクト型活動の意義について 吉村壮明 沖縄キリスト教短期大学　v, s D-12
13:50 14:15	鑑賞教育における文化的多元性 柳　芝英 東京学芸大学連合大学院　o A-13	言葉と連携した学校美術館構想 丸　雄治 横浜市立都岡中学校　p B-13	H.リードの「芸術を通した教育」論再考 幸　秀樹 宮崎大学　p C-13	生命論パラダイムからの実践 ー新自由主義的教育改革への対抗軸としてー 柳沼宏寿 福島市立清水中学校　v, o D-13
14:25 14:50	美術批評教育の歴史におけるラルフ・スミスの役割について ー美学観と美術史学観を中心にー 和田　学 筑波大学大学院　o A-14	絵本における「絵の表現」,「言葉の表現」 久保木健夫 錦城高等学校　s, o B-14	H.リードと英国美術教育改革 直江俊雄 筑波大学　p C-14	アーノルド・ボーデとカッセル・ドクメンタへの刺激について 鈴木幹雄 神戸大学　o D-14

次ページに続く

15:00 15:25		現代美術の「身体」と「場」との関係 ー英米の《美術》の現況とその制作背景からー 渡邊晃一 福島大学 p, s, o C-15	小学校と中学校の関連を意識した造形美術教育の再構造化の試み 須田一成・降旗　孝 山形大学大学院・山形大学 p D-15

15:30	講　演:　『美術教育における精神性について』　ドイツ・オルデンブルク大学教授 ルドルフ・ツア・リッペ先生
17:30	移　動
18:00	懇 親 会

第3日　3月28日(金)

研究発表	発表会場A ホールA	発表会場B ホールB	発表会場C 大会議室	発表会場D 中会議室
9:30 9:55	韓国の新教育課程における小学校美術教育について ー日本の現行教科書との比較を通してー 李　知塚 愛知教育大学大学院 p A-16	絵画に於ける純粋性 角　雄二 京都教育大学大学院 B-16	佐賀の近代洋画家たちと百武兼行の位置について 中村幸子 佐賀大学大学院 s C-16	地域活性化施設運営と美術教育の接点について ー京都府八幡市(株)やわた流れ橋交流プラザの実践例からー 長谷川　賢 京都教育大学大学院 p D-16
10:05 10:30	「学習の主題」にもとづいたカリキュラムの創造 中田　稔 鳥取市立若葉台小学校 p A-17	音楽大学における美術教育の再構築(2) 宇佐美明子 国立音楽大学 B-17	アートにおける人とのつながりー鑑賞型と参加型アートの可能性を関係性の視点から 加藤直美 大阪教育大学大学院 o C-17	小学校図画工作における教員採用と初任者研修に関する一考察 白井沙織 宇都宮大学大学院 p, o D-17
10:40 11:05	デジタルとアナログの共存 ー図画工作科題材の可能性ー 鵜　敦 山口大学教育学部付属光小学校 p A-18	ハンス・ホフマンの芸術教育観についての一考察 下口美帆 神戸大学大学院 p, s, o B-18	中学校美術科の支援資源としての美術館の可能性 桑　赤生・赤木里香子・山口健二・二宮美子 岡山大学教育学部付属中学校・岡山大学・岡山大学・岡山市デジタルミュージアム準備室 p C-18	アートは子どもから生まれる ーからだからのアプローチー 辰巳　豊・都司明子 お茶の水女子大学付属小学校 D-18
11:15 11:40			教員の職能開発(professional development)機関としてのアメリカの美術館 ー継続教育におけるパートナーシップー 赤木里香子・山口健二 岡山大学 p C-19	多文化共生時代における芸術教育を構想するために ーH-G・ガダマーの解釈学的芸術論ー 中村和世 筑波大学（日本学術振興会特別研究員） p D-19

11:50	堀 典子先生,他, 科研費研究発表『鑑賞と表現の統合を図る鑑賞教育の方法論に関する研究』
13:00	総　会

《注》1．発表の準備は,発表者控え室にて行ってください。
2．研究発表の進行は次の通りです。一鈴（15分経過）,二鈴,（20分経過）,質疑応答（5分）
3．視聴覚機器略記号:v=VHSビデオセット,p=プロジェクター（パソコン接続用）,
s=35mmスライドプロジェクター,o=OHP

美術科教育学会「東地区」研究発表会
ー本年度の開催予告と
第３回研究発表会 in 茨城報告ー

「東地区」では、以下の２つの研究発表会が予定されています。いずれも、詳細は、次の学会通信にてご案内いたします。

第４回「東地区」研究発表会 in 函館

1　日時　平成15年(2003)7月26日(土)
午後13：00～16：00

2　会場　函館市芸術ホール
（北海道立函館美術館隣り，五稜郭公園前）

〒040-0001 函館市五稜郭37－8
TEL 0138-55-3521 FAX 0138-55-3586

3　連絡先　佐藤昌彦
北海道教育大学教育学部函館校
〒040-8567 函館市八幡町1番2号
TEL・FAX 0138-31-4533(研究室)
Eメール　satomasa@cc.hokkyodai.ac.jp

第５回「東地区」研究発表会 in 宇都宮

1　日時　平成15年(2003)9月中旬（予定）
午後13：00～16：00

2　会場　宇都宮美術館講義室
(〒320-0004 栃木県宇都宮市長岡町1077)

資料代　500円（当日）

3　内容
宇都宮美術館では、「ヨハネス・イッテン造形芸術への道」展開催に合わせて、学会「東地区」研究発表会を予定しております。
本展覧会は、ペルン美術館並びにヨハネス・イッテン財団、また日本では自由学園から作品をお借りして、美術家であり、美術教育者であったヨハネス・イッテンを再考するものです。

宇都宮美術館学芸課　岡本康明

＊　＊　＊

美術科教育学会「東地区」
ー第３回研究発表会報告ー

金子一夫（茨城大学）

東地区第３回大会は美術教育史研究部会と合同で、平成14年(2002)12月21日（土）水戸市の茨城大学教育学部D201教室を会場に開かれた。
茨城大学の院生・学生を除くと、参加者は30名であった。少なかったように見えるが、参加者の内訳を見ると、20名が県外から出席された美術科教育学会員で、残り10名が茨城県内の学会員や現場の教員であった。普通とは逆の数字である。県外参加者には北海道、秋田、岡山、奈良といった水戸から遠隔地在住の方もあった。

開催担当者としては、県内参加者はもとより、特に20名の県外学会員の参加に感謝申し上げ、そこに当会開催の意義も確認したい。

当会のテーマは「現代日本における美術教育理論の課題－アジア的退行を超えて知的美術教育論へ」であった。四人が発表した後に緊張ある討議が行われた。その後、懇親会が催され、これも県外者中心に15人が参加した。四人の発表内容を広く知っていただきたいので、当日配布された『概要集』の残部を横浜大会で、500円で頒布する予定である。

発表題目とその要約を以下に挙げる。

○金子一夫(茨城大)
「アジア的退行を超えて知的美術教育論へ」
○ 武藤智子(茨城大・院)
「造形遊びの発生過程」
○ 向野康江(茨城大)
「児童画水準の歴史的変化」
○ 新井哲夫(群馬大)
「久保貞次郎の児童画評価」

金子の発表は、造形遊び理論と西田哲学とは現在性の強調、歴史性・過程性の軽視という点で共通することを指摘し、美術科教育理論における歴史・過程性の復権を主張した。現在性は行為の意味内容を問わない。しかし、教育では意味内容も過程性も無視することはできない。近時の美術科教育理論の低迷と神秘主義への傾向は、共同体内の親密な情緒を重視し外部に無関心なアジア的段階社会の特性から来ている。日常においては美点であるこのアジア的なものの限界を自覚し、知的美術教育論を確立していくべきとした。教育内容ばかりではなく、実践の方法論においても知的方法が必要とした。すなわち知的接近と知的概括である。造形遊びの公的理論はプレアジア的、すなわちアフリカ的要素に満ちていて、高度資本主義に突入した日本の段階とかけ離れてしまったことを指摘した。

武藤智子氏の発表は、造形的な遊びが昭和52年の学習指導要領に導入されたことを、46答申を起源とする「ゆとり教育」「幼少連携」といった学校教育改革理念、造形教育センターでの実践や議論、指導要領作成協力者会議での議論、現代美術を基礎とする大阪のDoの会、大阪教育大学附属平野小学校の実践等が絡み合って実現したことを論証した。

向野康江氏は、図画教科書掲載の児童絵画作品の変遷について発表した。児童の作品様式は、教育者・大人の意向が反映されているという観点で、明治期から現代までの教科書に掲載された児童絵画図版の様式水準を検討した。特に戦後の図画工作科教科書のそれを詳細に検討した。昭和40年代、50年代にそれらは高度な表現に達した。しかし、平成元年、平成10年代と逆行を始め、高学年にかつての低学年レベルの水準の作品が掲載されていると指摘した。それは児童作品がそうなっているのではなく、大人がそれを要求しているのであるとした。

新井哲夫氏の発表は、久保貞次郎が立脚した児童画評価の基準の特徴についてであった。久保の「創造的な絵」「非創造的な絵」という評価の内実は、全体的印象、児童の意欲や姿勢についてが、主であり、造形表現そのものについての要素が少ない。その他、作品に対する実感・直観の重視し、自然発生的でナイーブな表現、幼児や小学校低学年の作品、明るく楽しい雰囲気の作品への嗜好がある。それに対して、造形表現上の問題、児童画から絵画への過渡期の作品、自己表出的要素の少ない絵、写実的傾向や暗い雰囲気の絵には

無関心である。このような久保の特異な評価基準が1940年代後半以降の美術教育界に衝撃と影響力をもったのには、従前の常識とかけ離れていて、新たな美術教育の方向を模索していた人たちを捉えたと、主観性の強い内容が議論を抑制したことがあると指摘した。

＊　＊　＊

特集　「教育課程を創る」(8)

美術教育「現在・過去・未来」
ー教育史に学ぶー

浜本　昌広（武蔵野女子大学）

現下の学校教育界は、何処(いずこ)も多忙を極め、行き届いた教育は不可能といえる程の疲労と混迷を抱えている。子どもの側から見ても、不登校児が11万人を超え、人間疎外や学力低下が論じられる不幸な状況にある。

もはや、きれいごとでは対処できない。

時代に見合う、望ましい教育課程の吟味も含め、どこに打開の道を見出すのか、現状から発するこの重要な課題には、いくつかの迫り方があり、歴史的考察もその一つである。

副題の「教育史に学ぶ」は、この２月に亡くなられた山住正己氏(前都立大学総長)の著書名（新日本出版社）と重なる。

氏は常に教育の良心を毅然と掲げてこられた方であり、芸術教育にも造詣が深く、私個人としても、草野球に興じた関係もあって、早過ぎる死が残念でならない。

さて、教育課程は時代と深く関わることから、半世紀に渉る私の美術教育実践歴をふまえ、私なりに史的概観を行い、そこからの教訓と今後の課題に若干触れてみたい。

まずは、史的にみて教育界の性格は＜戦前の抑圧＞・＜戦後の希望と新しい抑圧＞・＜現代の苦渋と混迷＞といえよう。

「戦前」のわが国の体制には、個の尊厳に基づくものは全く見当たらない。

天皇を神とし、元首として崇め、「君が代」の永遠を歌い、一旦緩急ある時は、死を厭わず戦う皇国の臣民育成の教育であったことは周知の通りである。美術の時間も例外でなく、子ども心に私も、勇敢な日本の兵士が、敵陣に突入していく様を、胸を躍らせ描いていた。

今から思うと、当時の教科書に添った表現であり、完全に教化されていたと言える。

広島に原爆が落とされ「戦後」が始まる。

焼き殺され、累々とした黒こげの死体を目の当たりに、間一髪で生き延びた私は、再びこうした殺りくと欺きは許せない思いから、被爆詩人、峠三吉のうたう＜人間をかえせ・・・＞の立場に共鳴し、平和と民主主義を掲げる、憲法・教育基本法の理念を軸とした教育実践を課題とした。その当時、多くは主権者としての自覚をもち、希望と理想にもえ、民間教育団体とかかわった。合い言葉として、の「教育課程の自主的・民主的編成」や「一人はみんなのために、みんなは一人のために」が飛び交い、「抑圧からの解放」、「真実を貫く表現」等のテーマ性を持ち、美術教育にかける情熱は燎原の火のように全国を覆った。

戦前の反省から、＜権力による教育支配があってはならない＞とする教育基本法の第10条が生かされ、当時の「指導要領」はあくまでも基準に過ぎず、教師による教育課程の自主的創意性が最大に尊重された。

民主的高揚期といえよう。

ところが、朝鮮戦争を境に米国の対日戦略が反転し、日米安保条約の調印後は教育行政も一転して上意下達的となり、1958年にみる

指導要領の改訂は拘束性を持って始まった。

人事につながる＜勤務評定＞や「君が代」「道徳」が導入され、「美術・図工」の時間数の削減が始まり、戦後の希望はこの頃から挫折していく。

しかし、この改訂が逆に刺激して、教育を根源的に問いただし、より探究的な研究と運動に結び付いていったことは、あたかも踏み付けられることで、強い根と茎を作り出す「麦踏み効果」に似て教訓的である。

(「日本教育小史」・山住正巳・岩波新書が詳しい)

教科書も広域採択に変えられ、ともすると全国一律の教材と実践が見られるようになり、他方、中学は受験体制との狭間で、矛盾が激化し、教育の逆流と統制は目に余る状況が続く。

私は憤懣やる方なく、こうした教育状況に対してどう活路を開くかを求めて、大江健三郎氏を迎え、話を聴く会を持った。

ところが、内容は当時、氏が障害児の父親になられての子育てと戸惑いに就いてで、あった。まさに「個人的な体験」である。

その時は理解不足であったが、今にして分かったことは、その個人的体験の切実さと意味の重さが、即、テーマへの応えであった。

つまり、人間としての個の尊厳がもつ根源的価値こそが普遍的にして最大であるという観点である。国や民族の違いを超えてそれがいえ、すべての基本に位置づく。

個が、その生を開花することに繋がる連帯と教育と表現活動のレアリティこそが、最大の力と説得力を持つことに他ならない。

こうした普遍性と時代性を踏まえた、創造的活動に誇りを持ち、ねばり強く、実りあるものにしたい、という示唆と言えよう。

美術教育への国民的理解と支持はこうした基本姿勢と実践があってこそであろう。

危惧する統制や画一教育の問題もまた、このこと無しには乗り越えられまい。

「未来」への歩みは、普遍的な基本理念に立ち返り、質の高い研究と実践のひろがりにおいてこそ成り立つ。その視点で見るとき本学会の中でも、すでに真摯なその活動の姿を多く観ることができる。

例えば、このシリーズで取り上げられた竹井　史氏の4500人を超える地域に根ざしたクラフト活動「親子フェステバル」。佐藤昌彦・佐々木宰氏にみる北海道ならではの教材づくりや、堀　典子女史にみるドイツとの比較でわが国のビジョン作りなど、等、皆さんがこの道を拓いておられる。

学会発表などでは、従来は蚊帳の外にあった「老人に創造と生きる悦びを」取り戻す実践の俵国昭氏。芸術療法に光を当てておられる日野陽子女史ほかのグループ。綴り方教育を取り込む上中良子女史。地域の教師集団とゼミで取り組まれる新井哲夫氏など、現実に立脚しての活動がある。

それに加えて近代教育の原点である、Ｊ・デユーイやH・リード等の基礎理念を今日的に再評価し、美術教育の発展につなげる文献紹介のために、献身的努力をされている方々の労を多としたいものである。

こうした姿の中に美術教育の未来がある。これからの教育はどうなるの、ではなく、「教育をどうする」の意気がある。

本学会は、こうしたアクティブな活動を一過性の分散的花火に留めてはなるまい。

これらをオーケストラ的に響き合わせ、教育全体の危機の克服、なかんずく人間の尊厳が美的に輝く状況をめざしたい。

さて、「教育をどうする」は冒頭の山住氏のことばであり、それを受けてか、「教育をどうする」岩波書店刊がある。21世紀に向けて多彩な316氏の珠玉の提言が記載されていて、心強い連帯がそこにもある。

＊　＊　＊

平成14年度科学研究費補助金採択課題
本学会関連一覧追加分

先号の科学研究費採択課題記事に、記載漏れがありましたので、ここでお知らせいたします。失礼いたしました。(宇田)

＜萌芽研究＞
新規分
上野行一：公立文化施設における創造的な芸術教育プログラムに関する研究、130 万円

＜基盤 C＞
研究代表者：鈴木幹雄
研究組織：鈴木幹雄、堀典子（横浜国立大学）、長谷川哲哉（和歌山大学）
研究課題：「ドイツにおける文化創出システム《ドクメンタ》へのバウハウス教育学の貢献について」
科学研究費補助金配分額：
－平成１４年度：８００（千円）
－平成１５年度：８００（千円）
－平成１６年度：６００（千円）

＊　＊　＊

■新入会員のお知らせ■

二宮典子（岡山市役所文化政策課デジタルミュージアム準備室）
山口健二（岡山大学教育学部助教授）
押田彰子（厚木市立清水小学校教諭）
岩井香織（パリ１３大学教育文化資源研究グループ博士課程）
大山奈保
志村裕子（東京芸術大学大学院）
遠藤信也（東京学芸大学教育学部附属高等学校教諭）
橋本亨子（聖徳大学　大学院）

■ 事務局から ■

会員名簿の訂正箇所をご報告いたします。(事務局にご連絡をいただいた方の分です)
会員のみなさまには大変ご迷惑をおかけいたしました。重ねてお詫びいたします。

＜訂正事項＞
俵　国昭
住所：〒８１６－０８０２
福岡県春日市春日原北町４－１２－１アーサー春日原センティオ８０２号
Tel/Fax ０９２－５７３－９５２３
勤務先：〒８１８－０１９４
福岡県太宰府市五条３－１０－１０
第一福祉大学　教授
Tel ０９２－９１８－６５１１
Fax ０９２－９１８－６５１０

桶田洋明
住所：〒８９０－８１
鹿児島市唐湊３－４０－８（電話番号は同）

森田耕太朗
所属：京都造形芸術大学芸術学部美術・工芸学科彫刻コース　非常勤講師
Tel　０７５－７９１－９１２２
特定非営利活動法人Arts Planet Plan from IGA 代表理事
Tel　０５９５－５３－１０７７

小山貞雄
住所：〒６７３－１４２１
兵庫県加東郡社町山国２００６－４８－８－８３４
勤務先電話：０７９５－４０－２２２２

今井健一
勤務先削除

祭恵真
勤務先：茨城県下館市大田委医院福祉事業部企画担当

原巧
所属：徳島市新町小学校　教頭
Tel ０８８－６２２－３３４８

■海外会員
徳　雅美
住所：Department of Art and Art History
California State University,ChicoChico,CA 98929-0820
大学名　カリフォルニア州立大学 チーコ校
助教授　Tel:530-898-6866

葛西朋子（０３年３月１７日以降住所）
〒１２０－００３４
東京都足立区千住１－３７－１０－３０１
Mail:kasai_t@hotmail.com